

総合学習の研究

安藤富美子 梶原 修 川合 勇治 白井 宏
高橋 祐子 田中 裕巳 徳井 輝雄 三橋 一夫
安田 久美

総合学習の理論と実践

——新たな飛躍を目指して—— (その2)

1 わがグループの歩み

田中 裕巳

私達のグループは1979年に発足してから、「総合学習」を中等教育段階で実践することの必要性という共通の認識の下に集まり、共同で理論的な研究とささやかな実践を試みて来た。その歩みは牛歩の如く、否、前に進んでいるのかさえ分からないほど遅々たるものに過ぎなかったが、その歩みを記録しておくことだけは努めてきた。1983年度紀要に徳井が「総合学習研究四年の歩みから」を書き、84年度紀要に田中が「今までの経過」を書いているから、いまさらその遅々たる歩みを回顧してみることも蛇足に過ぎないのだが、私たちの研究、実践の問題点と今後の方向を明らかにすることの方にむしろ力点を置いて“歩み”をまとめてみたい。

① 前史

総合学習グループ結成の以前にも、公害学習をテーマとする超教科的試みがあった。1973年度紀要には、徳井を中心とする「公害教育の試み」、「総合教科的学習指導をめざしての試み」の2論文が掲載されていて、中学の技術だけでなく、国語や理科の中での公害教育の取組み、総合教科的学習指導の必要性が述べられている。しかし、このグループは自主的な研究会として活動を続け、その後、グループとしての論文は発表していないし、校内研究グループとしての名のりもあげなかった。

しかしながら、総合学習の研究グループがこの公害教育のグループを基盤として発足したことは、総合学習の研究グループ発足の第一声の中にしめされている。1979年度紀要で徳井は「総合学習と公害教育」を書いているが、これは当時のグループのメンバー全員で、

当時本校が採択していた各科の全教科書について、公害および環境問題に関してとりあげている単元を洗い出し、それを整理したものである。この作業を通して、理科・社会・保健・技術などの教科での連携授業の必要性、共同の教材づくりまでには至らなかったが、他教科において公害問題・環境問題がどのように扱われているのか、その実態を知ったこと、そして、教科担任制の中学・高校においてはそのような連携プレイそのものが如何に大切なことであるかを身にしみて知ったことは、私たちの遅々たる歩みの中でも、記念すべき“第一歩”であったと言える。

② 平和教育としての 研究旅行への取り組み

公害教育に続いて私たちのグループが取り組んだテーマは、平和教育であった。高2研究旅行が京都を中心としたものから、萩・津和野・山口などの中国地方に移ったのは山陽新幹線の開通という要因もあって、ほぼ10年ほど前からである。大久野島の国民休暇村に1泊する際、広島に寄ってから行くようになった。当時、倫理・社会を担当していた田中は、自分自身が被爆者であるということもあって、個人的に教科の中で「広島訪問」の意味を問い続けてはいた。グループ発足の第2年次(1979年度)、たまたまグループのメンバーの多くが、高2の学級担任・教科担任をしていたことから、グループとして平和教育に取り組むことを決めた。その成果が1980年度紀要の「総合学習の場としての研究旅行の試み」である。国語・社会・理科・英語などの教科の中で、原爆詩を読んだり英訳したり、核の原理や現代の核状況などが、それぞれの教科

の独自性を生かしながら体系的に教授された。同様の試みはその後も実施されているが、グループ全体として取り組めたのはその年度がピークであった。

③ 「ゆとり」の時間を利用した総合学習の実践

この実践には前後3年を費した。第1年次(1980年度)は、中学3年生の「ゆとり」の時間を利用して展開する総合学習に向けてのテーマ、内容の吟味の年であり、1981年度紀要の田中論文「「ゆとり」の時間を利用した総合学習の実践に向けて」に報告されている。第2・3年次(1981・82年度)は、「人間について考える」というテーマの下での実践の年であり、指導案およびその結果・反省等は、1982年度・83年度の紀要に収録されている。

前記徳井の“総合学習研究四年の歩みから”や田中の“総合学習「人間について考える」をどう評価すべきか”等が明らかにしているように、①「人間について考える」というテーマの下で、10回の授業に一貫性が乏しかった、②授業もやりっ放しで、せめて最後にまとめの時間が必要だった、③結局、講義型授業が多くなってしまい、「ゆとり」の時間を利用していることと矛盾してしまい、生徒の興味をそぐことにもなった、④総合学習をグループとして実践することには限界があり、中・高ともに、教育課程あるいは学校教育全体の中での総合学習の位置を明確にして行く必要がある、などの問題点が明らかにされた。この中3の「ゆとり」の時間を利用した総合学習の試みについての総括をもっと深化させ、グループのメンバー全員のものにしておかないと、今年度から取り組む高3選択科目での試みの充実は期待できないであろう。

④ 総合学習についての理論的な研究

中等教育段階での総合学習の可能性を追及した研究は非常に少ない。私たちが総合学習の必要性を触発されたのは梅根悟・海老原治善・丸木政臣編『総合学習の探求』(勤草書房、1977年5月)であった。同書における「教科、総合学習、自治的諸活動」の三領域論の提唱(P.51)、「平和・公害・差別・性」のミニマムの提唱(P.53)などは、中3「ゆとり」の時間を利用した総合学習の実践を経て、更に高校段階での新たな実践に取り組もうとしている現在、あらためて吟味してみる必要がある。

日本教育方法学会編『学級教授論と総合学習の探求』(明治図書、1983年2月)については、田中が1984年度紀要の“総合学習の可能性……平和教育を核として”の中で触れている。同書は、小学校での実践に

ふれたものばかりで余り参考とはならないが、教科と教科外活動の2領域論の中に総合学習を解消する論点を知ることは出来る。

私たちのグループは、1984年度から、グループの研究テーマに「総合学習の理論と実践——新たな飛躍を旨として」を掲げている。1984年度の前記田中論文は、イリイチの思想にふれながら平和教育こそが公害・差別・性のテーマをも内包しうるのではないかと示唆している(P.8)し、徳井は“平和教育への取組み”を書き、平和教育の内容と必修クラブ、HRでの実践をレポートしている。なお平和教育については、『平和教育の理論と実践』(草土文化、1977年8月)、『平和教育の展開』(民衆社、1983年7月)などもあり、今後大いに参考にして行くべきであろう。

⑤ 選択科目「総合学習」の実践に向けて

私たちは1986年度から高校3年生に選択科目「総合学習」(仮称)を設けることを予定し、1985年度をその準備のための期間と考えている。高校教育の総合化、カリキュラムへの総合学習の正当な位置づけへの布石になればとも考えている。

「ゆとり」を使った実践と違って、正式の科目と認定されることは、かつて田中が“総合学習「人間について考える」をどう評価すべきか”(1983年度紀要)で触れている問題点も含めて、次のような課題を解決しなくてはならないと思う。

- イ. 大テーマを何にするか。仮に「人間について」としていても、高校で学んだことを集約し、統一的な人間観・世界観の獲得を旨しながら、しかも一人一人の興味・関心を生かせるような小テーマをどのように設定したらよいか。大テーマ、小テーマと生徒一人一人の研究テーマをどのように関連づけるか。
- ロ. 教師による方向づけ(授業・見学・個人指導など)と生徒の自主的な学習(調査・発表・レポートなど)とをどう関連づけるか。教師による授業ばかりでは、総合学習とは名ばかりになる。
- ハ. 週2時間、年間約60時間分の年間指導計画、授業案、テキスト、教材などを周到に準備しておくこと。
- ニ. 定期テスト、レポートなどをどうするか。総じて評価の方法をどうするか。

以上の課題を十分な時間をかけて検討し、高校段階での総合学習の実践を展開したいと考えている。以下の諸論稿は、上記イ～ニの課題に答えるべく、グループのメンバーが、年間指導計画、授業案づくりのた

き台として考えた小テーマ、およびその第一次的デッサンである。公表するに値するものではまだないが、私たちのグループの実践の足跡として、また内部的討

論および興味・関心をお持ちの方々からの御批判、御示唆を仰ぐための資料として掲載するものである。(以下は提出順)

2. 高校三年生を対象にした 総合学習の構想

徳井輝雄

1 はじめに

高校普通科の教育はともすると大学入試準備の傾向にのみ、教師も生徒も父母もとらわれがちである。受験準備とは別の側面——即ち生き方を学ぶための一つの方策として、われわれは総合学習を提起し一定の実践を積み重ねて来た^①。その中で今後の課題として高校三年間の学習を受験とは違った立場からまとめ完成させる必要性のあることを指摘した。以下はその具体的構想の一つである。

2 総合学習のテーマ

高校生に研究してもらいたいテーマとして次のようなものが考えられる。

(1) 平和の探求

どうして戦争は起こるのか。現在日本は、米ソの核戦略体系の中でどのような立場に置かれているのか。核戦争がもし起こったらどのような事になるのかをヒロシマに落された原爆の威力から推測してみる。

(2) 現代日本の諸問題

公害、核戦争の危機、教育問題……これらの根底にあるものは何かをさぐっていく。

(3) 現代科学体系の諸特徴

合理主義の変質・数量化数式化のもつ問題点、それらを支える価値観は何かを探ぐる

(4) 現代社会の疎外について

人間疎外をもたらすものは何かを追及する。

(5) 人間の認識の深まり方

人類の自然観の深まり方と、人間個人の認識の深まりについてみていく。

これは科学技術史の学習にもなる。

3 授業内容

以上述べたテーマは関連や重なりがある。それらを高校三年の選択の授業として展開するために次のような素案を提示する。

総合テーマ 「科学技術と人間」

[1] はじめに

「われわれは学校で諸科学の基礎となるいろいろな教科を学んでいるが、いったい何の為に学ぶのかを考えて欲しい。われわれは新しい科学技術の創造に努力しなければいけない。新しい科学技術体系とは、戦争を避け恒久平和をこの地球上にもたらすのに耐えうるものでなくてはならない。これが、われわれに課せられた課題であり、この課題の解決の為に学ぶのである。」という事を力説する。

[2] 現代科学技術の特徴

2-1 現代科学技術のもたらしたもの

公害、戦争など人間疎外

新聞記事等時事的な題材を扱う

2-2 利潤至上主義のもたらしたもの

人間観の非人間化……一面的能力主義、棄老
価値観の金銭化 ……木下順二の夕鶴

尾崎紅葉の金色夜叉

などが題材となろう。

労働の非人間化 ……チャップリンのモダン
タイムス等を見る。

教育観のゆがみ ……投資としての教育とは。
専門化、選別化のゆ
すぎ。

[3] 科学技術の思想的背景

3-1 ヨーロッパにおける初期ブルジョワジーの思想

自由主義、能力主義、合理主義の由来、と
その中身の検討。

3-2 自由主義、能力主義、合理主義の現代的意味

たとえば人間の能力の数量化のもつ問題
点、金儲けだけのための合理主義(合理化)
がもたらしたもの(医療における金儲
け主義)などをみていく。

[4] 現代科学技術のすすむべき道

人間と自然との関係を本来のものに戻すにはど
するか。